



ショートコメント

★★★

Data 2023-146

監督・脚本・主演：アクタン・アリム・クバト

脚本：ダルミラ・チレブベルゲノワ

出演：ミルラン・アブディカリコフ／タアライカン・アバゾヴァ

父は憶えている

2022 年／キルギス・日本・オランダ・フランス映画

配給：ピターズ・エンド／105 分

2023（令和 5）年 12 月 9 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

👁️👁️ みどころ

キルギスという国は、何となくモンゴルと似たようなイメージだが、その位置は？本作が描く、小さな村の風景は？

芥思雪（チャオ・スーシュエ）監督の『草原に抱かれて』は、ゲルと羊が目立つ、モンゴルの大草原を舞台に、認知症を患った母親と息子との絆を温かく描いたが、邦題を『父は憶えている』とした本作に見る父親と息子の絆は・・・？

23 年ぶりに故郷に戻ってきた父親は、一言も喋らないまま、毎日黙々と村のゴミを片付ける仕事に従事したが、それは一体なぜ？さあ、一枚のモノクロ写真、懐かしい歌声——思い出は再び甦るのだろうか？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

◆第 96 回アカデミー賞国際長編映画賞キルギス代表。フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」受章！アクタン・アリム・クバト監督最新作。それが本作の“売り”だが、「遊牧民の国キルギス」って、一体どこにあるの？キルギスといえば、私は何となくモンゴルと結びつけて考えていたが、キルギスはモンゴルよりずっと西の方、つまり天山山脈よりも西にある。

公式ホームページによると、「標高 5000 メートルを越える天山山脈のふもとに広がる雄大な山岳と草原の国キルギス。かつてシルクロードの一地点として栄え、遊牧民の国としても知られている。」と書かれている。また、その地図は【図-①】の通りだ。

◆他方、本作のチラシには、「父は帰ってきた。記憶と言葉を失って——。一枚の古いモノクロ写真、懐かしい歌声——思い出は再び甦るのか？」の文字が躍っている。本作の原題は『Esimde』だが、英題は『This is What I Remember』、そして邦題は『父は憶えている』だ。そして、チラシには、「23 年という失われた時間。キルギスの故郷の村は、もうすっかり変わってしまった。そこに、あの頃の懐かしい歌声が聴こえてきた・・・。」と紹介されている。

【図-①】



これを読めば、それだけで本作のストーリーは概ね理解できるはずだ。

◆乔思雪（チャオ・スーシュエ）監督の『草原に抱かれて』（22年）（『シネマ 53』289 頁）は中国映画で、内モンゴル出身の若手女性監督、チャオ・スーシュエのデビュー作だった。そして、原題『Qi dai（脐带）』のイメージの通り、同作は、認知症が進み徘徊の危険がある母親と、母親を自分の身体に縄で結びつけて介護する息子との絆を温かく描いた感動作だった。そして、その舞台は当然、内モンゴルの大草原だった。

それに対して、冒頭のスクリーン上に映し出される本作の舞台は、大きな川とそこに架かる一本の橋が印象的な村で、一方は天山山脈を望み、他方は小さな村落になっている。そのため、ゲルと羊の群れが印象的だった『草原に抱かれて』のモンゴルの大草原とは大きく趣を異にしている。また、『草原に抱かれて』は、母と息子の切っても切れない絆を描くものだったのに対して、本作は、記憶と言葉を失って、ロシアから 23 年ぶりに帰って来た父親ザールク（アクタン・アリム・クバト）とその息子クバト（ミルラン・アブディカリコフ）との絆を描くものだ。

冒頭、ザールクと共に徒歩で橋を渡ったクバトは、妻や長女らが待つ我が家にザールクを招き入れたが、ザールクの反応は？

◆本作のキーウーマンは、夫ザールクの失踪（？）後、夫と息子のクバトを捨てて（？）、村の有力者（？）から請われるまま嫁いでいった妻ウムスナイ（タアライカン・アバゾヴァ）。日本の民法第 30 条は「不在者の生死が 7 年間明らかでないときは、家庭裁判所は、利害関係人の請求により、失踪の宣告をすることができる」と、「失踪宣告」の制度を定め

ている。それを考えると、ウムスナイの行動は非難されるものではない。また、日清、日露、太平洋戦争中の日本では、夫が戦死すれば、請われて亡き夫の弟の妻になることもよくあったから、それと対比しても、ウムスナイの行動は非難されるべきものではない。しかし、父親の帰りをずっと待ち続けていた息子クバトは、そんな母親の行動をどう感じていたの？そしてまた、何よりもウムスナイ自身の気持ちは？

◆本作のもう 1 つのミソ (?) は、チラシに書かれている通り、ザールクが「記憶を失ったまま 23 年ぶりに戻ってきた」ことだ。もっとも、なぜそんなことが可能だったのかの説明は本作の中では全然ないから、そんな設定に少し違和感があるが、名優アクタン・アリム・クバトの、上映中一言も喋らない演技は、さすがと思わせるもので見応え十分だ。

そんなザールクはクバトたち家族に笑顔を見せないまま、また歓迎してくれる旧友たちも無視したまま、毎日一人で黙々と村に溢れるゴミを片付ける仕事に従事していたが、それは一体なぜ？

◆日本に全く馴染みのないキルギスという国に“レクサス”のような日本的高级車が走っていることに、私は驚かされたが、それ以上に 21 世紀の今、こんな形でザールクのような一私人が黙々と村のゴミ片付けに従事する姿にビックリ！キルギスのゴミ収集の制度は一体どうなっているの？私はそこにも興味が湧いたが、本作ではそこではなく、なぜザールクが毎日そんな行動をとっているのか、に注目したい。

◆果たしてザールクの記憶は戻ってくるの？息子のクバトはそれを期待して父親に寄り添っていたが、近代化の波に呑み込まれ、変わっていく故郷の実態は否応なくザールクの前に押し付けられていた。しかし、妻の側からの離婚申し出が認められていないイスラム教の教えの中、ウムスナイが有力者の夫に対して離婚の申し出をする決意をしたある日、昔歌った懐かしい歌を声高らかに歌っていると・・・。

◆「一枚の古いモノクロ写真、懐かし歌声——思い出は再び甦るのか？」そんなストーリー展開の結末は、あなた自身の目でしっかりと。

2023（令和 5）年 12 月 12 日記